コラム ㉕

中嶋哲夫の「人事も歩けば」

離島に渡った保健師さん

２年半ぶりに南大東島を訪問しました。島に渡られた元看護師さんを訪ねることが主目的。ついでに島の方々と久しぶりに情報交換する，そんな旅です。同行者は３人。妻，某コンピューター会社社長のＡさん，医療機関職員のＢさん。仕事で縁を得た方々です。Ａさんはクライアントに紹介された方。南大東島との縁を開いてくださいました。Ｂさんは筆者が指導した組織の職員。そこの看護師さんに島を紹介したことから，島に赴任されることになりました。偶然の縁がつながって，１人の人生が大きく変わったお話です。

看護師さんは岩井田悦子さん。大きな病院の師長の立場で定年を迎えられました。定年後，雇用延長の形で働いておられたところ，南大東島からの問い合わせが届きました。話によれば，彼女は島に渡ることを即決されたとか。筆者がお目にかかったときには「これから第四の人生です」と目を輝かせておられました（「離婚をしているので，他の方より一回多いのです」とあっけらかんと話されました）。

島には保健師さんが２人。ところが１人の方が産休，もう１人の方が病気により，突然，保健師不在となったのです。民生課長が手を尽くしたものの，応募者が見つからず，名刺箱にあったＢさんの名刺をたよりに，藁をもつかむ思いで電話されたそうです。

▲保健師として働く岩井田悦子さん

筆者は何回か南大東島を訪ね，そのたびに知り合いにも声をかけていました。あるとき，急なキャンセルがあったので，Ｂさんに声をかけました。突然の話でも機会を逃さないＢさんと思えばこそです。そうして一緒に島に行きました。村役場に行ったときに，休日にもかかわらず役場に出てこられた民生課長と名刺交換をしたというだけの縁。細い細い縁がつながってしまったわけです。

岩井田保健師は，高齢化が進む島において，認知症の高齢者に対する偏見を２年ほどで取り除き，高齢者向けの散歩公園を作られました。島の高齢者が明るくなったと，みなさんに感謝され，私にまでお礼を言ってくださいます。今回お尋ねしたときに「島で死にたいというお年寄りの願いを実現できる高齢者住宅を作りたい」と強く述べられていました。介護施設が存在しない，人口1,000人超の島が離島の高齢者介護のモデルになるかもしれない。定年後の組織人が，あらたな志を基にその専門性を活かす。心地よい話を聞かせていただきました。

（MBO実践支援センター代表）